

京都の地蔵盆

— 京都市北区の地蔵盆を事例として —

近石 哲[※]

はじめに

地蔵信仰は、既成仏教のなかから民間信仰として衆生（庶民）の間に流布するようになったものである。平成の今日、社会構造の近代化および無宗教層の増加により、その信仰は危機をむかえていると言わざるをえない。

その一方で、地蔵祭祀としての「地蔵盆」は、近畿地方を中心とする行事のなかで、少しずつ形を変えながら今日まで盛大に行われてきている。たとえば、京都市で夏に行われる大きな行事としては、7月の祇園祭り、8月16日夜の大文字の送り火（五山の送り火）、そして町内会中心の地蔵盆などがあげられる。本稿では、京都市北区で行われる地蔵盆について注目し、現地踏査で得られたことを中心にして以下に述べたい。

1. 地蔵講と地蔵盆について

(1) 地蔵講

「地蔵菩薩に対する講会。平安時代末期には民間に広まり、念仏講・子育て講・安産講として定着した。平安時代も末になると末法思想の流行とともに地獄必定の考えから、地獄での救済者である地蔵に信仰が集まり、各所で地蔵講が開かれるようになる。またこの期に六観音にならって六地蔵が考案され、六道の衆生を救済するとされた⁽¹⁾。」

※歴史民俗資料科学研究科博士前期課程

このように地蔵によって極楽に往生するとして、死者供養に地蔵講がひらかれるようになる。

さらに講とは、信仰上あるいは経済上の目的を達成するために、志を同じくする人々のあいだで組織された社会集団の一種である。日本の地域社会には、講もしくは講集団と称する多様な社会集団が形成されている。その多くは前近代に成立をみたもので、そのため封建的遺制や信仰に対する伝統色を残していることが多い。

ところで、地蔵信仰とは、江戸時代になってから民間信仰と結びついて広まり、子育て・火防・盗難除・病氣平癒など庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏として各地に地蔵が造立されるようになった。また、各地で地蔵講が結成され、毎月の二十四日を地蔵の縁日として祈るようになり、夏の終わりの地蔵盆は子供たちを楽しませる行事ともなってきた。

さらに、各地に地蔵講や地蔵盆などが広がった結果、念仏供養塔、回向供養塔その他種々の供養塔を主尊として、あるいは墓碑として、地蔵石仏の造立が非常に多くみられるようになった。そのため、関西地区を中心に現在では石仏イコール地蔵というイメージが定着している。

尚、古く関西地区では、地蔵講中が中心となって地蔵盆を伝承していたが、現在で

は町会が引き継いでいる。

(2) 地蔵盆

ここでは、地蔵盆の一般的な解釈についてみていきたい。

「八月二十三日と二十四日にかけて、京都市を中心に近畿各地で行われる地蔵尊をまつるさまざまな行事。地蔵盆と呼ばれ、地蔵信仰のみ表面化したのは、神仏分離後の明治以降と推定できる。八月二十四日の地蔵盆に、愛宕火とか万燈、地蔵さんの火などと俗称される火祭が催されるのは、神仏習合時代の名残といえよう。⁽²⁾」

地蔵盆は全国的に行われている風習であるが、滋賀、京都、大阪、兵庫の近畿地方と北陸若狭地域などを中心として特に盛んである。

地蔵盆（二十四日）では、地蔵のある町内の人々はこの日までに地蔵の像を洗い清めて新しい前垂れを着せ、化粧をするなどして飾り付け、地蔵の前に集まって灯籠を立てたりお供え物をしたりして祀る。

地蔵盆の前後には、地蔵の据えられている家や祠の周囲などに、地蔵盆独特の提灯が多く飾られる。京都では子供が生まれると、その子の名前を書いた提灯を奉納する風習がある。おおむね女子は赤、男子は白で、その子が地蔵盆に参加しているあいだは、毎年飾られる。

地蔵菩薩は、中近世以降子供の守り神として信仰（民間）されるようになった。ひろく知られた伝説によれば、地蔵菩薩が、親より先になくなった子供が賽の河原で苦しんでいるのを救うという。このことから地蔵祭においては特に子供が地蔵菩薩の前

に御参りし、その加護を祈願する慣わしになったという。地域によっては、仏僧による読経や法話も行われることがあるが、おおむねそれらの多くは子供達に向けたものである。さらに、地域によっては、地蔵盆当日の朝に「数珠回し（数珠くり）」が、読経法要の後で行われる。これは、町内の子供達が、直径2～3m（大きいのは5m）の数珠を囲んですわり、念仏（読経）にあわせて順々にまわすというものである。

今日では、地蔵盆は子供のための祭りとも言える。地蔵に御参りした子供達は地蔵の前の席で供養の菓子や手料理などを振る舞われる。また地域の子供達が一堂に会するため、子供達に向けたイベントも行われたり、その場は子供たちの遊び場となることもしばしばである。

初日の朝に地蔵盆の用意をして、仏僧による読経、子供におやつ配布（午前と午後）、夜のイベント（踊りや花火など）を行う。翌日は、おやつ配布、お供えのお下がり配布、後片付けといった流れが多いようである。

しかし、子供が少なくなったことや大人たちの都合がつきにくくなったりすることから、1日のみで終えてしまう町内も増えつつあるのが現状らしい。また、地蔵盆の目玉的な福引は、「ふごおろし」ともよばれる形式で行われていたが、伝承されている地域はごくわずかということらしい。その「ふごおろし」とは、福引担当の家の向かいの家から渡したロープにつるし紐で福引品を手繰り寄せたという。さらに、その品を紐で一階へ下ろして渡すらしいのである。しかし、最近ではこういう福引はほとんど

見られなくなった。

この地蔵盆も、町内によっては天道大日如来が祭られており、それらの町内は大日如来の縁日である旧暦七月二十八日もしくは、その前後に同様の祭りである「大日盆」を行う。前述の地蔵盆と同じく日程をずらして土・日にすることが多くなった今日では、他の地域の地蔵盆と同日に、大日盆を勤めることもある。以上が、「地蔵盆」と「大日盆」の概要である〔八木隆明：1981 p.56～61〕。

2. 京都市北区における地蔵盆

(1) 京都北区（調査地域）の概要

地蔵盆の具体的な内容についてみる前に、私が2010年夏に現地踏査をおこなった京都市北区の紫野・紫竹・小山地区についての概要説明を簡単にしておきたい。

北区は、京都市を構成する11区のひとつである。そこは閑静な住宅地を中心とした平野部と、北部の山間部から成っている。区内には金閣寺や大徳寺・上加茂神社といった洛北の寺社のほか、立命館大学・佛教大学・大谷大学・京都産業大学などいくつかの大学がある。北大路駅と北野白梅町付近に商業施設が多い。このほか、新大宮商店街という南北に長く歴史ある商業地区も存在する。私が踏査のために訪れた紫野・紫竹・小山地区というのは、それぞれ隣接しており、徒歩でもまわれるほどの距離である。なお、この3ヶ所の地区から少し離れた深泥池地区でも調査を行った。

(2) 京都市北区

(小山・紫竹・紫野地区)の地蔵盆

①北区小山花ノ木町北部の地蔵盆

小山花ノ木町の北部は、市営地下鉄烏丸線北大路駅の駅裏に位置する地区で、89世帯から成る閑静な住宅街であり、古くからの住人が多く暮らしている。毎年、地蔵盆は、旧暦七月の二十四日の前の土・日どちらか日で行うのが、ここ近年の慣わしになっているという。当番制とされる世話役の多くがサラリーマンであるため、仕事が休日になる土・日に行うようになったということである。

次に、地蔵盆の準備と当日の祭祀次第について紹介する。

地蔵盆の前日に当たる金曜日になると、準備として町会の長老達で地蔵を祠（御堂）から出し、身を洗う。古くは真綿で洗っていたらしいというのが、現在では、たわしや洗車ブラシで洗っている。数十年前まで、洗い清めた後に地蔵に派手な化粧を施していたが、現在では顔に白塗りをし、口に赤紅をさすだけのものになっている。きれいになった地蔵の首に、赤白の胸あて（ヨダレかけともいう）が結びつけられる。以前は、乳児や幼児のいる家から胸あてを持って来ていたといい、その胸当てには、乳幼児の名前・生年が記されていたということである。しかし、現在では町会で用意をし、その後、地蔵を祠（御堂）に再度安置して、祠の周りに奉納幕をつけ、両横に赤い高張り型の延命地蔵大菩薩の地蔵盆提灯を取り付けて終わる。地蔵像の準備がおわってから、祠（御堂）の前の広場にテントを張り、地蔵盆用の提灯を飾り付ける。前日の準備は以上のようなものである。

地蔵盆当日の祭祀次第は、朝八時半頃になると、町会役員が地蔵の祠の前にお供物の台を設置して、お菓子、果物などの供物・花などを供える。また、灯明用の蠟燭を立てるなどして飾り付けをする。午前十時～十一時半までの間は、幼児や小中学生を対象とし、引換券と交換するかたちでおやつが配られる。子供たちは、ヨーヨー釣りやシャボン玉であそぶ。十二時半からは、真言宗智山派十二坊上品蓮台寺から招いた僧侶による法要がおこなわれる（写真1）。ここでは、大日経、般若心経といった経が上げられるということである。通常僧侶の法要の後に数珠回しがあるが、小山花ノ木町の地蔵盆では数珠がない為数珠回しは行われていない。二時～三時まで、子供たちは輪投げをして遊び、三時になると午後のおやつをもらう。午前と同様、これも幼児や小中学生を対象として、引換券と交換して配られる。三時半になると、町会役員が中心となって地蔵のもとに集まった供物町内に配る。これは「お供養配り」と呼ばれる。六時～七時半までは、地蔵盆の参加者によるカラオケ大会が開かれる。これは参加した者には参加賞が渡される。七時半からは、子供たちが参加してふく引き大会がおこなわれる。そして八時過ぎに、地蔵盆の祭りは終了する。

この地区の地蔵像は、町内の辻の祠（御堂）に常に安置されている。町会役員82歳の話者によると、1974（昭和49）年に始まる京都市営地下鉄烏丸線の開通工事のために、区画整理される前は、安置場所として町内の入り口に近いところにある辻の角であったらしい。その後、区画整理や交通量の増

加によりやむを得ず辻の奥に安置されるようになった。尚、祭祀の費用は町会費と小さい子供がいる家庭と町会役員による寄付によりまかなわれている。

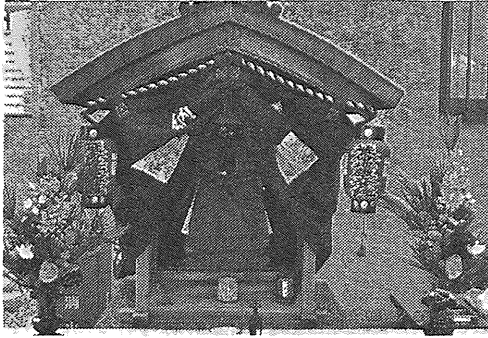
②北区紫竹桃ノ本町の地蔵盆

紫竹桃ノ本町は、市営地下鉄北大路駅から2kmほど離れた、62世帯から成る閑静な高級住宅街である。地蔵盆の準備は、前述の小山地区とはほぼ同様であるため詳細は省略する。

特筆すべき事は、他の地区では祭祀場所としてテントや駐車場などに設営するが、紫竹桃の本町では道路上で法要をした後、個人宅で食事等を行っているということである。この地区は、老年層の住人が多く小さい子供が極端に少なく、地蔵盆に参加する人もあまりないので個人宅で行なうらしい。「本来は、子供の祭りなのに老人会的な行事になりつつある」と、町会役員も少しさみしそうに語っていた。この法要・読経は真宗大谷派唯明寺の僧侶によるものである（写真2）。この真宗大谷派の本尊は阿弥陀如来であり、本来地蔵菩薩の信仰はもたない宗派である。それでも、地域に根ざした「お寺」として、地蔵盆行事の法要は依頼があれば勤めると僧侶は語る。このことは民間信仰を定義する場合しばしば用いられる、「教団や教理の上での組織を持たず、一般民衆によって採用されている呪術宗教的信仰を指す⁽³⁾」という項目に合致していると考えられる。尚、この地区でも数珠回しがない。

③北区紫竹辻ノ内町の地蔵盆

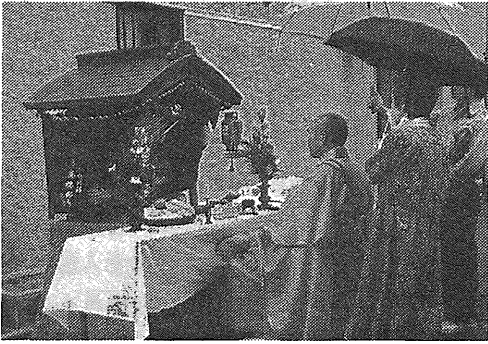
写真1：北区小山花ノ木町北部の地藏盆



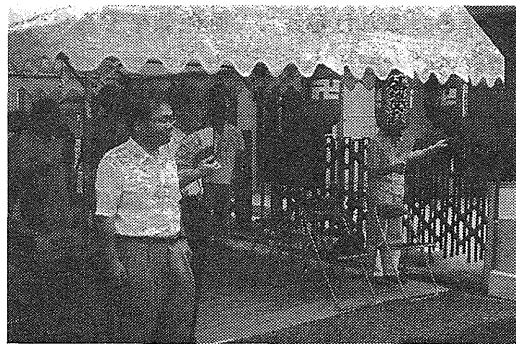
地藏像と祠の飾り付け



地藏飾り付け（お供物・お花）



真言宗智山派 十二坊上品蓮台寺僧侶の読経法要

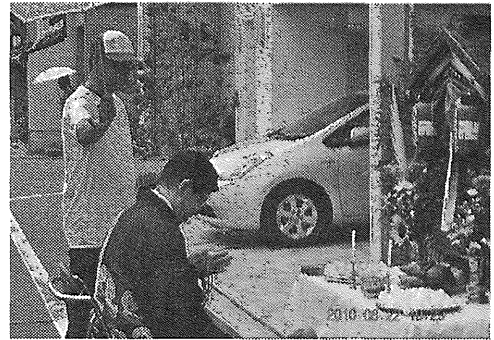
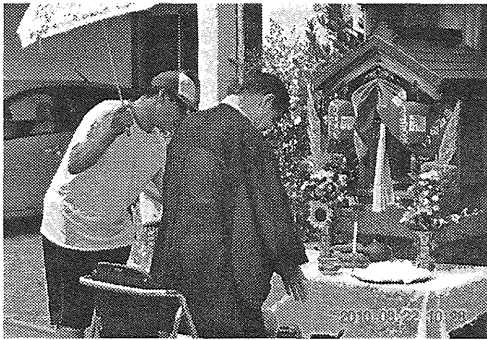


町内会役員

写真2：北区紫竹桃ノ本町の地藏盆



地藏像と祠の盆用飾り付け



真宗大谷派 唯明寺僧侶による読経法要



唯明寺僧侶の法要後の法話

この地区は、②とおなじ紫竹に所属している前述の桃ノ本町から少し離れたところにある町で、約100世帯から成る町会である。ここは新大宮商店街の裏手に位置している。地蔵盆祭祀は前に挙げた各地区とはほぼ同様であるため省略する（写真3）。

特筆すべきは、地蔵盆の祭祀場所が辻タクシーの車庫を借り、地蔵を移して安置・飾り付けを行っていることと、近所にある唯明寺の住職が法要・読経を勤めていることである。さらに、前述の他の地区にはなかった、数珠まわしが法要・読経の後で行われる。

④北区紫野新門前町の地蔵盆

この地区は、新大宮商店街の中心部に近い場所にある。但し、商店主等々が役員を務めており、商売のかたわらに地蔵盆の準備をしている為、話を聞く事がほとんど出来ない状態であった、写真撮影も少し離れて望遠で撮るような雰囲気であったので細部については不明である。尚、この地区の地蔵像は大日地蔵大菩薩である（写真4）。

以上が、京都市北区の市営地下鉄北大路駅から徒歩で廻ることのできる4町会における地蔵盆祭祀の内容である。次に、同じ北区に位置するが、これらより北の方にある深泥池地蔵堂で行われた地蔵盆について、調査で得られたことを報告する。

⑤鞍馬街道口深泥池地蔵堂の地蔵盆

深泥池（みどろがいけ、地元はみぞろがいけと言う）は、京都市北区上加茂深泥池町に所在する池で、俗に深泥ヶ池などとも記す。地元に住む人たちは、これをみぞろ

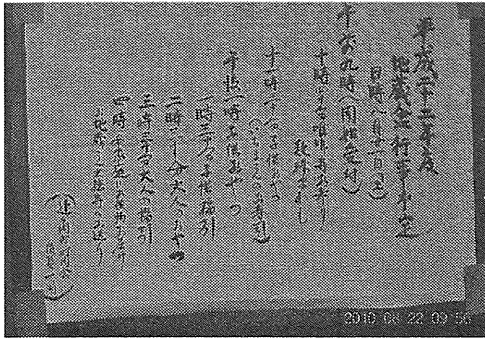
がいけと呼んでおり、蛇足ではあるが、この池のまわりには民家が少なく、タクシーの怪談等心霊スポットでも有名であるらしい。

深泥池の地蔵の歴史は京都の六地蔵の建立にまでたどることができる。『源平盛衰記』巻六によると、保元年間（1156～59年）西光法師が都の街道の入り口に、六体の地蔵を安置し、「廻り地蔵」と名付けたことに由来するという。即ち、奈良街道（伏見六地蔵）、西国街道（鳥羽地蔵）、丹波・山陰街道（桂地蔵）、周山街道（常盤地蔵）、東海道（山科地蔵）とともにこの鞍馬（若狭街道）の深泥池が選ばれた。これは、仏教の六道に見立てて一体ずつ、各街道の入り口に分祀したのが、現在の六地蔵巡りに引き継がれている。このように、街道の入り口に地蔵尊が安置されたのは、昔から疫病や悪霊等々は街道を通してやってくると考えられており、その侵入を防ぐという意味も含まれていた為である。

以上が、深泥池の地蔵堂の地蔵菩薩即ち鞍馬口地蔵の起源・由来である。明治時代まではこの地蔵堂に祀られていたが、現在は地下鉄鞍馬口駅の上善寺に移されている。現在の深泥池地蔵堂は、この地区の町会が管理していて、その信仰形態も民間信仰として継承されている。

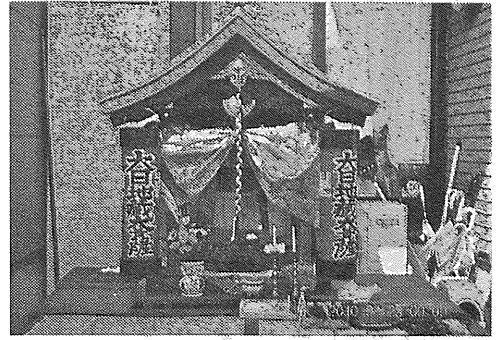
この歴史ある地蔵堂で、地蔵の縁日である旧暦七月二十三・二十四日で行われている地蔵盆の「大念珠まわし法要」が50年ぶりに復活した。私は現地で偶然この復活を知ったのだが、これに出会うことができたことも何か因縁を感じざるを得ない。以下に、2010年8月19日付「京都新聞・市民版」

写真3：北区紫竹辻ノ内町地藏盆



地藏盆の式次第

写真4：北区紫野新門前町地藏盆



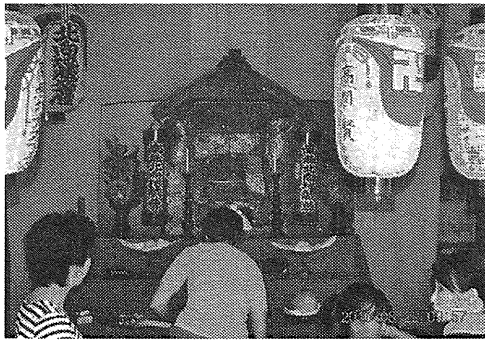
大日地蔵菩薩の飾り付け



地元（町内会）の人たちのお参り



大日地蔵菩薩の飾り付け



の記事を要約してみる。

「京都市北区の深泥池地藏堂で二十三日に行われる地藏盆で、半世紀ほど途絶えていた大念珠まわし法要が復活することになった。「京の六地藏」の一つ「鞍馬口地藏」が明治初期まで安置されていた同地藏堂では、かつて地藏盆も盛大であった。だが五十年ほど前から念珠法要が絶えたという。

住民によると、念珠まわしでは江戸末期の一八六五年に地元の講が寄進した念珠を用いる。だがひもが切れ虫食いなど傷みが激しく、修繕が懸案であった。地域では近年、宅地開発が進み新住民がふえており、地域の姿を知る機会にしてもらおうと、半世紀ぶりに復活させることにした。念珠は直径五米と二米の二本あり、本年七月に左京区の仏具店（田中仏具店）を通じ修理した。法要は二十三日午前十時から、古式にのっとり、大人と子ども約四十人が輪になって一つの念珠を手で繰り、大きな珠（親珠）が自分の順に廻ると拝礼する。

地域に住む世話人代表の稲井新郎さん（80歳）は『地藏盆のたび、念珠の修理が気になっていた。当地の地藏は古い由緒もあり、昔ながらの念珠まわしができるのがうれしい、大勢の子どもに集まってほし』と話している。」（写真5）

地藏盆前日の準備状況は、前述のそれぞれの地区同様であるので省略し、二十三日の祭祀次第を紹介する（写真6）。

町会役員たちが中心となり、地藏像の前にお供物等々を飾り付ける。ここでは、ひょうたん型の珍しい形をした京野菜の鹿ヶ谷かぼちゃが目を引いていた。十時になると、大念珠まわし法要が始まる。このとき、

念仏の回数を記録しておくための札が用いられる。十一時になると、スーパーボールすくいやヨーヨーすくい、金魚すくいといった子供たちの遊びがはじまる。その後、昼食として町会の婦人達による特製カレーライスや本物の竹を用いた流しそうめんなどが子供にふるまわれた。三時には、マジックショーや福引・スイカ割りがおこなわれ、おやつやアイスが子供たちに配られた。夜の七時からはビンゴ・ゲームがおこなわれ、当たった子供には賞品も与えられている。七時半になると、尼講念仏がはじまる。この法要では、大人による大念珠まわしがおこなわれる。

この地藏盆は毎年、地藏の縁日である旧暦七月二十三・二十四日に行われている。「時代がどんなに変化しても、この歴史ある地藏堂の地藏盆だけはできるだけ古くからの祭祀を伝承して行きたい」という世話役の言葉も聞かれ、地藏盆にかける意気込みが感じられた。尚、深泥池における法要の念仏は僧侶による読経ではなく、地区の住人によるものであった。夕方に行われる、尼講念仏は時間の都合上今回は見る事が出来なかったので、次回の調査としたい。

以上が、京都市北区の5箇所即ち小山・紫竹桃ノ本町・辻ノ内町・紫野・深泥池の地藏盆についての調査した結果の報告である。この地藏盆は、来年（平成23年）も京都で調査を予定しているが、場所をもう少し拡大してみたい。例えば、「ふごおろし」といわれる福引が現在でも伝えられている西陣地区や中京区にも足を運んでみたい。

(3) 今後の地藏盆に関する現地調査

写真5：北区深泥池地藏堂の地藏盆（念珠まわし法要）



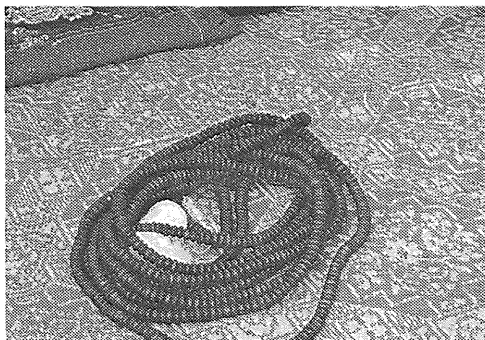
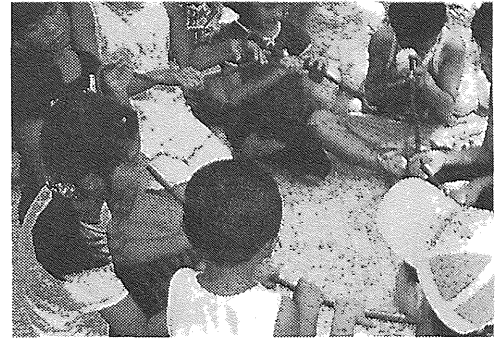
地元役員による読経法要



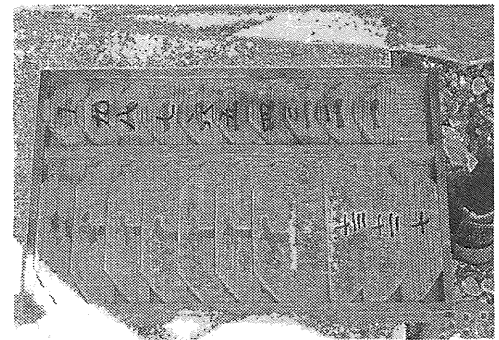
大念珠まわし法要



50年ぶりに復活した大念珠まわし法要



大念珠

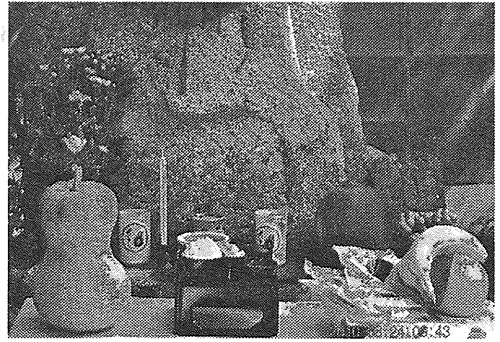


念珠まわしの回数数え札

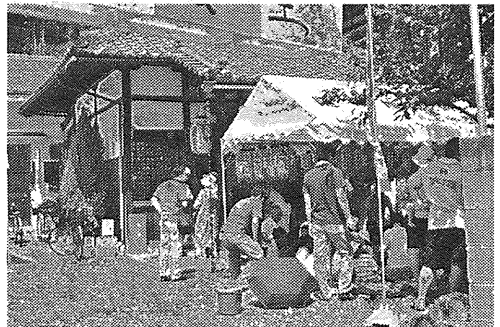
写真6：北区深泥池地藏堂の地藏盆



鞍馬口地藏像



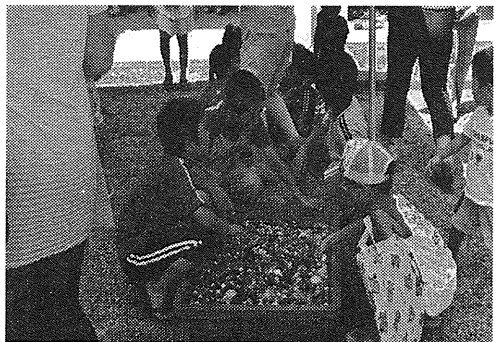
お供物飾り（左側 鹿ヶ谷かぼちゃ）



地元役員による法要開始前の風景



写真奥が石造の地藏像



スーパーボール・ヨーヨーすくい

京都の文化が京都出町柳から八瀬を通り若狭小浜へと向かう若狭街道、通称鯖街道を北上したと言われる中で、地蔵に関する祭祀や信仰も、これに伴い流布伝播したと考えられる。この若狭小浜では、化粧地蔵と呼ばれて、地蔵像に色とりどりの化粧を施す内容の祭祀が行われるというらしい。さらには、地区によっては地蔵盆の変わりに盆行事として精霊船「オショウライブネ」（精霊船）と呼ばれる精霊送りがあり、この行事も子供集団との関わりが深いといわれる。同じく若狭小浜に隣接する地で、片や地蔵盆、片や精霊船の祭祀と異なる内容の行事が行われるのは何故かということに注目して調査したい。

古くから民間信仰のなかで伝承されてきた地蔵祭祀は、近畿地方、とりわけ京都・琵琶湖周辺の滋賀・大阪・兵庫で、さらに北陸の若狭で現在も盛んに行われている。これらの研究では、歴史的にみて京都から若狭街道（通称鯖街道）を北上し、伝播したと思われる地蔵信仰と地蔵祭祀が、地域を変えることによってどのような変遷をたどっていったのかを捉えるべく、若狭小浜にも現地調査の範囲を広げてみたい。

3. 地蔵盆からみる地蔵の信仰形態

(1) 京都における盆行事の変遷

京都における地蔵盆祭祀の調査から、信仰形態の在り方について考えてみたい。最初に、「お盆」について少し触れてみる。

お盆とは、一般的には八月十三日から十六日（一部では七月十三日から十六日）に行われる盂蘭盆会のことを指している。

この盂蘭盆については多くの説があるが、

盂蘭盆経の目連説話に基づき、祖霊を死後に苦しみの世界から救済するための仏事といわれる。この盂蘭盆の仏事を盂蘭盆会といい、一般的には盆棚をつくり、種々の供物を祖先の霊・新仏・無縁仏（飢餓仏）に供えて冥福を祈る。

この盂蘭盆が終わった後、八月二十三日から二十四日に行われるのが、地蔵盆である。さらに八月二十七日から二十八日にかけて行われるのが、大日盆である。この大日盆も二十三日から二十四日に行われる地蔵盆と同様の祭りとなっている。さらには、地蔵盆も縁日の前の土・日に行なわれるようになった。いつの頃かについては不明であるが、その変化の理由の一つとしては、地域の講組織の衰退によるものであるということが挙げられる。古くは、地蔵盆の祭祀は地蔵講中により、大日盆の祭祀は大日講中により各々の縁日にあわせて行われていた。講中のなかで祭祀の運営を担うのは、今や地域の町会役員に変わり、その役員の大多数はサラリーマンである。役員の仕事の関係から、休日の土・日に祭りを開催することも時代の流れから考えるとやむをえないことであろう。さらに、大日盆もその名前を「天道大日如来⁽⁴⁾」の地蔵盆と改め、現在ではほとんど全ての町会が大日盆を地蔵盆と呼んでいる。これは二十三日の前の土・日（一部の地域は二十八日の前の土・日）に行われている。

(2) 京都における地蔵盆の信仰観念・形態と地蔵像の特色

①地蔵盆の信仰観念・形態

日本における地蔵信仰の歴史をみると、そ

こで実現されてきた信仰の内容は、主なものとして往生、現世利益と死者供養が挙げられる。そのうち、往生については浄土(阿弥陀)信仰の登場より地蔵信仰は次第に弱まっていった。現世利益と死者供養における地蔵信仰の流れは、今日においても大きな変化はしていない。

現世利益は、主に延命、息災、治病を指し、「延命地蔵・身代わり地蔵」として広く信仰されている。一方の死者供養は、先祖供養というよりは水子の追善供養色のほうが濃く、「水子、子安、子育て地蔵」として広く信仰されている。こうした地蔵信仰の形態について、前述の京都市北区で行われた地蔵盆における、地域の人たちの信仰形態について考えてみたい。

京都市北区の地蔵盆において、人々は地蔵菩薩に対して町内安全、町内の子どもの安全と健全な成長を祈願している。この地域では子どもが生まれると、その家では地蔵盆で子どもの名前を入れた提灯をあげるという慣習が見られるが、これは町内のこどもの健やかな成長を願う地蔵盆の趣旨とも合致する。こうした信仰観念は、現世利益的なものである。

以上のことより地蔵盆の行事からは、地蔵信仰のもつ死者供養の側面は見てこないと言ってよかろう。

②町内の地蔵像の特色

町内の辻角に安置されて、「お地蔵さん」・「地蔵さん」・「大日さん」の愛称で呼ばれている地蔵像等について少言及してみたい。

町内に祀られる「お地蔵さん」の像は、

一般に、40cmから50cmほどで上部がやや細くなった卵型の石である。また像容はほとんど認められず、それは暦年による摩滅ではないものが多い。町内の人々は、この石に赤い涎掛けをかけて、「お地蔵さん」として祀るのである。ただし、町内によっては像容のはっきりした地蔵石仏をもっている。

地蔵盆のあと、八月二十七日、二十八日に、大日盆・如来盆の行われる地区がある。これは、地蔵はないが、「大日如来」の像はあるという町内で行われる行事で、地蔵盆とまったく同じ形式の子供の祭りであるといわれる。今回、現地調査で訪れた、京都市北区紫野新門前町の「大日さん」は、前述の地蔵像と同様の形状であり、形の上では区別しにくい。飾り提灯の色は、地蔵が赤、大日如来は白で異なるのだという。また、大日如来は男で「位も高く」、地蔵は女であるという話も聞かれた。新門前町では、隣合わせの紫竹地区の各町会と別々の日に祭りを行っていたが、ここ10年前ぐらいからは、同じ日取りで行うようにしたという。

おわりに

日本各地で様々な伝統的な年中行事・風習といったものが次第に失われつつある昨今、京都で行われる地蔵盆は、後世まで残し伝えたい行事の一つである。京都の夏の主な行事には、祇園祭りや五山の送り火など全国的に知られた有名かつ大きなものが多いが、これらは大勢の人々の力によって守り続けられてきている。

町会中心で行われる地蔵盆は、今回の調査で訪れた、京都市北区桃ノ本町の町会役

員が「本来は、子供の祭りなのに老人会的な行事になりつつある」と寂しそうに語ってくれたことが印象深い。今の京都では、洛中と呼ばれる地域即ち京都市中心部から、次第に隣接の郊外に住居を変える人が多くなり、したがって中心部の子供の人数も少なくなつて、子供の騒がしい声で賑わっていた地蔵盆も、年々さびしくなりつつある地域が増えてきた。

その反面、郊外の地域では新しいコミュニケーションづくりの方法として、この地蔵盆が捉えられている。しかし、善し悪しは別としてかつての民間信仰の意味合いは少なくなり、子供会活動の一環としての地蔵盆になりつつある。

京都の町中の細い道を歩くと、家続きの間の路地等々に小さな地蔵の御堂があるのに気づく。その御堂には、絶えず綺麗なお花が供えてあり、時には線香が香ることがある。それは、その町の年配の方々が、毎日のお参りを欠かさず地蔵さんのお守りをしているからである。そのことから、ただレクリエーションとしての地蔵盆が多くなる中で、伝統的な民間信仰の行事としての地蔵盆も、子供たちに対しても伝え残してほしいと感じた。

平成22年夏の調査では地域の人々の様々な想いというものに触れることができた。先のことであるが、再度補充調査として平成23年の夏にも訪れてみたい。

註

(1) 福田アジオ他（編）『日本民俗大辞典』
上 1999 pp.768～769

(2) 福田アジオ他（編）『日本民俗大辞典』

上 1999 pp.770～771

(3) 『民俗学辞典』1951：p.575

(4) 天道大日如来は、天道念仏の信仰により小さな祠に祀られた大日如来のことである。地蔵菩薩である「お地蔵さん」とは異なるが、地蔵盆と習合して信仰されている。（京都通・京都検定百科事典）

参考文献

・桜井徳太郎『講集団成立過程の研究』吉川弘文館、1962年

・田中久夫『地蔵信仰と民俗』（新装版）岩田書院、1995年

・田中久夫『近畿の民間信仰』「京都府」明玄書房、昭和48年

・服部比呂美『子ども集団と民俗社会』岩田書院、2010年

・林英一著『地蔵盆 受容と展開の様式』初芝文庫、1997年

・速水侑『地蔵信仰』塙書房、1981年

参考論文

・高橋涉「京都の地蔵信仰」宮城学院女子大学研究論文集57号 宮城学院女子大学文化学会1982

・高橋涉「京都の六地蔵参り」宮城学院女子大学研究論文集55号 宮城学院女子大学文化学会1981

・三村幸一「京の夏と地蔵盆」『化粧地蔵』池田弥三郎・牧田茂・三村幸一 淡交社 昭和48

・八木隆明「京都の地蔵盆」（第21回社会教育研究全国集会に向けて）『月刊社会教育』国土社1981